

2019年度

第61回 全国公立学校教頭会研究大会

第57回 近畿公立学校教頭会研究大会

2019年度 滋賀県小中学校教頭会研修会

(第2次案内)

# 滋賀大会

研究主題 「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

キーワード 〈自立・協働・創造〉

サブテーマ 「身近な環境との関わりを通じ  
持続可能な社会の担い手となる子供の育成」

期 日 2019年 7月31日(水)・8月1日(木)・2日(金)

全体会場 びわ湖大津プリンスホテル

分科会場

- びわ湖大津プリンスホテル
- 琵琶湖ホテル
- ロイヤルオークホテルスパ&ガーデンズ
- クサツエストピアホテル
- ホテルボストンプラザ草津びわ湖





全国公立学校教頭会  
会長 杉江 淳一

## 「滋賀大会によせて」

第61回全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会の開催にあたり、全国公立学校教頭会を代表しまして、ご挨拶申し上げます。はじめに、本研究大会を開催するにあたり、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、滋賀県、滋賀県教育委員会、大津市、大津市教育委員会をはじめ、関係諸機関、諸団体からご支援、ご協賛いただきましたことに衷心より感謝申し上げます。

全国公立学校教頭会は、全国約2万8千人の会員が「政策提言能力を備えた職能研修団体」として副校長・教頭の社会的地位や専門性の向上をめざして4つの方針の下、活動しています。第1の柱である「研修活動の充実」は重要な柱であり、全国公立学校教頭会のまさに「命」といえるものです。

今後、わが国の社会はグローバル化がますます多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新による生活の質的变化の進展が予想されています。このような将来の予測が難しい社会の中、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子供たちに確実に育む学校教育の実現が求められています。私たちの研究活動は、副校長・教頭としての「資質を高めるための研修を推進し、わが国の教育の振興に寄与する」という目的の下、第1期から40年以上にわたり継続して取り組んできた組織的な協働研究です。本年度は、全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」を掲げた第11期の3年次となります。生涯学習社会の構築に向け、学校教育においても子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし(自立)、個人や社会の多様性を尊重しともに支え合い高め合いながら(協働)、新たな価値を創造していく(創造)ことのできる資質・能力の育成に努めなければなりません。

本研究大会には、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てた全国からの多様な実践的研究が提案されます。「代表参加制」、「参加型の分科会」等の取り組みにより、副校長・教頭としての専門性を高め、実践的指導力が磨かれるものと確信しております。

結びに、「湖国 滋賀」における本研究大会が、学校教育の輝かしい未来に向けての豊かで実り多きものとなりますよう祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。



滋賀大会実行委員会  
委員長 高嶋 利明

## 「身近な環境との関わりを通じ 持続可能な社会の担い手となる子供の育成」に向けて

日本最大の湖「琵琶湖」を有する滋賀は、本州のほぼ真ん中に位置し、古くから交通の要所として重要な役割を果たしてきました。また、滋賀は琵琶湖とそれを取り囲む多くの山々を有し、古くから都が置かれるなど日本史上との関わりも強く、県全土にわたり自然・歴史・文化的資源が豊富に存在する地域です。

その滋賀の地において開催します今回の大会では、第11期全国統一研究主題を踏まえ、サブテーマを「身近な環境との関わりを通じ 持続可能な社会の担い手となる子供の育成」と設定しました。

「身近な環境」とは、自然環境はもちろんのこと、人、物、文化など、子供を取り巻く様々な環境を想定しています。これらに興味をもって主体的に関わろうとすることで豊かな感性が醸成されたり、他者への思いやりの心情が芽生えたりすると考えます。自分以外の他者を尊重し、うまく共存することのできる力は、これからの社会において大変重要と考えます。

「持続可能な社会の担い手となる子供の育成」とは、ESD理念に則り、環境、経済、社会が抱える様々な課題を自らの課題としてとらえ、まずは身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すための教育と考えます。今後、ますます変化が加速、拡大し続けるであろう未来社会を、受け身ではなく主体的に生き抜く自立した子供を育て、持続可能な社会の礎を築くことが、学校教育に課せられた肝要かつ不可避な使命であると考えます。

湖上を爽やかな風が吹き抜けるこの「湖国 滋賀」にて、サブテーマのもと、これからの日本の教育のあり方について皆様と一緒に考えていければと思います。関係者一同、精一杯のおもてなしの心で大会開催に向け、準備を進めています。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

# 開催要項



**主催** 全国公立学校教頭会 近畿公立学校教頭会 滋賀県小中学校教頭会

**後援** 文部科学省・全国都道府県教育長協議会・滋賀県・大津市  
 滋賀県教育委員会・大津市教育委員会・全国連合小学校長会・全日本中学校長会  
 全国へき地教育研究連盟・滋賀県都市教育長会・滋賀県町村教育長会  
 滋賀県小学校長会・滋賀県中学校長会・公益社団法人日本PTA全国協議会  
 滋賀県PTA連絡協議会・一般社団法人滋賀県教育会  
 公益財団法人日本教育公務員弘済会滋賀支部

(順不同)

## 大会主題 「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

全国統一研究主題 第11期3年次

キーワード < 自立・協働・創造 >

サブテーマ 「身近な環境との関わりを通じ 持続可能な社会の担い手となる子供の育成」

**開催期日** 2019年7月31日(水)・8月1日(木)・2日(金)

**開催地** 滋賀県大津市・草津市

**会場** 全体会場：びわ湖大津プリンスホテル  
 分科会場：びわ湖大津プリンスホテル・琵琶湖ホテル・ロイヤルオークホテルスパ&ガーデンズ  
 クサツエストピアホテル・ホテルポストンプラザ草津びわ湖

## 日程

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
<b>【1日目】 7月31日(水)</b> びわ湖大津プリンスホテル						受付 アトラクション DVD放映	開会行事	シンポジウム		
<b>【2日目】 8月1日(木)</b> 各会場		受付	分科会		昼食	分科会				
<b>【3日目】 8月2日(金)</b> びわ湖大津プリンスホテル		受付	研究ま とめ	記念講演	閉会 行事					

**アトラクション** よし笛コンサート 演奏 レイクリード

**シンポジウム** テーマ 「身近な環境との関わりを通じ 持続可能な社会の担い手となる子供の育成」

コーディネーター 小林圭介氏(滋賀県立大学名誉教授)

シンポジスト 勝山浩司氏(一般財団法人教職員生涯福祉財団専務理事・事務局長)  
 (国立大学法人 東京学芸大学 顧問)

シンポジスト 今関信子氏(児童文学作家)

シンポジスト 小林 徹氏(オプテックスグループ株式会社 代表取締役会長兼CEO)

**記念講演** 講師 今森光彦氏(写真家)  
 演題 「琵琶湖水系の美しい自然」



## テーマ『 身近な環境との関わりを通じ 持続』

### 研究の基本目標

今後、わが国の社会はグローバル化がますます多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新による生活の質的変化の進展が予想されています。また、このような将来の予測が難しい社会の中、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子供たち一人一人に確実に育む学校教育の実現が求められています。教育の現場にいる私たちは、新たな事態に直面した今後の教育の在り方を見極め、日本国憲法や教育基本法、学習指導要領の理念に基づき、学校教育の中に実現していくことが、大きな使命と考えています。

このような背景を踏まえ、「社会や地域に開かれた学校づくり」を展開し、未来を拓く「生きる力」を高め、豊かな人間性や創造性をもち、国際社会の一員としての自覚をもった人間を育成するために私たちは貢献しなければなりません。また、私たちは、副校長・教頭の職務内容の研究を通して力量を高め、国民の期待に応える魅力ある学校づくりに努めることが必要です。

以上のことから、次のことを研究の基本目標とします。

#### ●教育理念に基づく学校教育の実現

特色ある学校づくり、社会に開かれた学校づくりを展開し、生きる力を育む学校教育の実現を目指す。

#### ●副校長・教頭としての力量の向上

広い視野に立って学校運営が行えるよう、学校教育に対する識見を深める。

#### ●学校の社会的役割の推進

国民の期待に応える魅力ある豊かな学校づくりを推進する。

分科会	課題名	各課題の内容		
第1A	教育課程に関する課題	○教育課程の編成・実施・評価 ○学校経営・学校運営 ○教育理念 ○教育目標の設定 ○信頼される学校づくり ○生きる力 ○幼・保・小・中・高・特別支援学校の連携 ○コミュニティ・スクール ○土曜授業 ○地域との連携	全国	北海道(小)
第1B			近畿	京都府(中)
第2	子供の発達に関する課題	○豊かな人間性の育成 ○健康・体力の増進 ○確かな学力 ○課題を発見し解決する力 ○子供の発達を支える教育課題	全国	福島県(小)
			近畿	滋賀県(中)
			近畿	山梨県(小)
第3	教育環境整備に関する課題	○安全・安心 ○施設設備 ○家庭・地域との連携 ○学校規模適正化 ○文書事務・経理事務の管理 ○教育の情報化	全国	大阪府(中)
			近畿	奈良県(中)
			近畿	滋賀県(小)
第4	組織・運営に関する課題	○学校運営全般 ○人材育成 ○組織力の向上 ○危機管理や情報管理 ○地域連携 ○異校種連携	全国	岡山県(小)
			近畿	和歌山県(小)
			近畿	滋賀県(中)
第5A	教職員の専門性に関する課題	○教育の専門家としての意識高揚 ○指導力の育成 ○研修 ○服務・コンプライアンス意識 ○小中一貫教育 ○協働体制の構築 ○学校運営参画意識の向上	全国	香川県(小)
第5B			近畿	兵庫県(中)
近畿			滋賀県(中)	
第6	副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題	○「全国公立学校教頭会の調査」について結果報告及び考察 ○文部科学省働き方改革部会関係者等の講演	全公教総務・調査部	
特I	時宜に応じた課題	○学校教育の改善に関する講演 ○学校改革と副校長・教頭の役割に関する講演 ○グループ協議	全公教研究部	
特II	開催地の創意を生かした課題	○フローティングスクールによる環境学習に関する講演 ○琵琶湖の環境保全活動と環境教育に関する講演 ○グループ協議	滋賀県	



# 『可能な社会の担い手となる子供の育成』

## 研究の基本方針

### (1) 学校教育の課題の解決に努める

私たちの研究は、国民の期待に応え、教育基本法及び学校教育法等の諸法規に定められた教育の目標を達成することを究極の目的とする。そのために自ら職能を高め、学校現場が抱えている課題の解決に努める。

### (2) 副校長・教頭の職務内容や職務機能を追究する

学校運営において副校長・教頭としての関わりを大切にし、その職務内容を実践的に追究するとともに職務機能の充実を図る。

### (3) 研究成果を政策提言活動(要請活動)に生かす

研究活動と政策提言活動(要請活動)は全国公立学校教頭会の活動の二本柱である。研究の成果を政策提言活動に生かし、教育環境の整備に役立てていくよう努める。

提言テーマ	会場
今日の課題を捉え教育課程の充実を図る教頭のリーダーシップとは何か —「組織」「運営」「連携」の取組を窓口として— 学力向上に向けた授業改善と学びの環境づくりのシステム構築に向けた教頭の役割 —「学びを育む京丹波町メソッド」の理念に基づいた研究と実践を通して— 確かな学力の向上を目指した小中連携の取組と教頭とのかわり —「学びのスタンダード」推進事業を軸として— 社会に開かれた教育課程の実現を目指して —未来の創り手に必要な資質・能力を育むための教頭の役割— 児童生徒の理解・生徒指導・豊かな人間性の育成を目指して —関係機関との連携のあり方や方策について— 豊かな人間性の育成と校区一斉清掃 —地域との連携を深める取り組みに教頭としてどう関わるか— 課題のある子どもを中心に捉えた、どの子も育つ学びづくりと仲間づくり —共通実践と個別実践から効果的な教頭の関わりを探る— 子どもが安心・安全に過ごせる環境整備 —学校・地域・家庭との連携を通して— 地域連携教育と教頭の職務 —日本一広い村にある学校の取組— 「働き方改革」と教頭の役割 —学校における業務の効率化と情報化— 学校小規模化に伴う課題を克服する取組 —矢掛町における合同授業と合同学年部研修会の推進における教頭の役割— 小規模校における学校活性化を目指した取組 —地域や家庭、校種間の連携を通して— 学校の組織力を高める教頭の役割 —校内研究による授業改善から教育目標の具現化へ— 若年教員を計画的・組織的に育成するための教頭の役割 —地域の協働体制を生かした取組を通して— 教職員の資質向上にむけた教頭の役割 —「高砂市小中一貫教育」の取組を活かした道徳教育推進のあり方— 義務教育9年間で育む地域とともに生きる子どもの育成 —小・中一貫教育の推進と教頭の役割— 教職員の指導力向上を目指す教頭の役割 —小中一貫教育の取組を通して—	びわ湖大津プリンスホテル 淡海1・2
びわ湖大津プリンスホテル 淡海3・5	
びわ湖大津プリンスホテル 淡海6・7	
クサツエストピアホテル 瑞祥	
ホテルボストンプラザ草津びわ湖 ケネディルーム	
ロイヤルオークホテル スパ&ガーデンズ ローズ	
ロイヤルオークホテル スパ&ガーデンズ パール	
統・学校における働き方改革と副校長・教頭の役割 ※参加者は事前アンケートを全公教ホームページからダウンロードして記載し、10部お持ちください。	びわ湖大津プリンスホテル 淡海8・9・10
①「カリキュラムマネジメントを通しての学校教育の改善について」 —信濃教育会(長野県)での実践を通して— ②「麴町中学校の学校改革と副校長の役割」	びわ湖大津プリンスホテル プリンスホール
①「環境に主体的に関わる力を育むフローティングスクール学習」 —びわ湖や郷土について学び、考え、伝え合い、びわ湖と自分のつながりを見つめる子の育成を目指して— ②「ヨシいけドンドン作戦による琵琶湖の環境保全活動と環境教育」	琵琶湖ホテル 瑠璃

# シンポジウム 記念講演 講師紹介



## シンポジウム 【7月31日(水) 14:00~】

### ●コーディネーター 小林 圭介 氏



滋賀県立大学名誉教授  
理学博士・農学博士  
滋賀県生きもの総合調査委員会会長

【略歴】  
1940年生まれ 長野県出身 滋賀県彦根市在住  
1979年 滋賀県立短期大学教授  
1995年 滋賀県立大学環境科学部教授  
1997年~滋賀県立大学名誉教授  
第15次南極地域観測隊員(1973)および北極スバル  
パール諸島学術隊長(1985)として極地の植生調査  
に従事  
【主な著書】  
「日本植生誌」「植物社会学-生態学講座4」  
「滋賀県自然誌」「滋賀県レッドデータブック」  
「緑環境の幼児の発達過程に及ぼす影響について」  
等、著書・論文多数

### ●シンポジスト 今関 信子 氏



児童文学作家  
日本児童文学者協会会員、日本ペンクラブ会員  
滋賀県児童図書研究会会長

【略歴】  
東京生まれ埼玉育ち。  
幼稚園教諭として7年勤務の後、古田足日氏に師事し  
創作活動に入る。  
2017年まで滋賀県レイカディア大学で18年間手作  
り紙芝居の講座を担当する。  
2000年より4年間滋賀県教育委員を務める。  
子どもの遊び、児童文化に関心をもち、広く活動す  
る。  
【主な著書】  
「小犬の裁判はじめます」童心社  
「さよならの日のねずみ花火」国土社  
「永遠に捨てない服が着たい」汐文社  
「デニムさん」佼成出版

### ●シンポジスト 勝山 浩司 氏



一般財団法人教職員生涯福祉財団専務理事・事務局長  
国立大学法人 東京学芸大学 顧問

【略歴】  
1956年生まれ 北海道札幌市出身  
国立大学勤務後、1983年当時の文部省へ  
2004年 兵庫県宝塚市教育長  
2007年 文部科学省教育財政室長  
2010年 青少年課長  
2012年~2016年 国立大学法人東京学芸大学  
理事・副学長・事務局長  
2016年5月~ 財団勤務  
【主な著書】  
「週刊教育資料」や「学校事務」誌等に多数寄稿、中央  
教育審議会答申作成

### ●シンポジスト 小林 徹 氏



オプテックスグループ株式会社  
代表取締役会長兼CEO

【略歴】  
1971年 同志社大学工学部卒業  
1979年 オプテックス株式会社創業  
代表取締役就任  
2017年 オプテックスグループ株式会社  
代表取締役会長兼CEO

オプテックスグループとして、光技術を中心とした事  
業展開を行う一方、子会社のアウトドアスポーツクラ  
ブ「オパールオプテックス」を通じて、県内外の子も  
たちに琵琶湖畔でのスポーツ体験学習(カヌー、ドラ  
ゴンボート、いかだづくりなど)と水環境体験学習(湖  
畔の生き物しらべ、ヨシ紙を使った笛づくり、プランク  
トン観察など)の機会を提供している。

## 記念講演 【8月2日(金) 10:00~】

### 演題 「琵琶湖水系の美しい自然」

### 今森 光彦 氏



1954年、滋賀県生まれ。写真家。琵琶湖  
をのぞむ田園風景の中にアトリエを構え活  
動する。自然と人との関わりを「里山」とい  
う空間概念で追い続ける。一方、熱帯雨林  
から砂漠まで、地球上の辺境地の取材をつ  
づけている。また、近年は、自然のかたちを  
ハサミひとつで鮮やかに切り出すペーパー  
カット作家としても知られ、その作品は、全  
国の美術館などを巡回している。

写真集に『里山物語』(新潮社)、『湖辺』

(世界文化社)、『世界昆虫記』(福音館書店)、写真文集に『萌木の国』(世  
界文化社)、『里山を歩こう』(岩波書店)、写真絵本に『神様の階段』(偕成  
社)など多くの著書がある。

第20回木村伊兵衛写真賞、第28回土門拳賞、第48回毎日出版文化賞、  
第56回小学館児童出版文化賞、第42回産経児童出版文化賞大賞など数  
多くの賞を受賞。



## 全体会会場 第1・3日目

### ①びわ湖大津プリンスホテル

〒520-8520 滋賀県大津市におの浜4-7-7  
【TEL】077-521-1111 【FAX】077-521-1110

JR大津駅より  
無料バス運行(約15分)

## 分科会会場 第2日目

### ①びわ湖大津プリンスホテル

1A分科会 淡海1・2  
1B分科会 淡海3・5  
2分科会 淡海6・7  
6分科会 淡海8・9・10  
特I分科会 プリンスホール

〒520-8520 滋賀県大津市におの浜4-7-7  
【TEL】077-521-1111  
【FAX】077-521-1110



JR大津駅より 無料バス運行(約15分)

### ②琵琶湖ホテル

特II分科会 瑠璃

〒520-0041  
滋賀県大津市浜町2-40  
【TEL】077-524-7111  
【FAX】077-524-8318



JR大津駅より (徒歩約10分)

### ③ロイヤルオークホテル スパ&ガーデンズ

5A分科会 ローズ  
5B分科会 パール

〒520-2143  
滋賀県大津市萱野浦23-1  
【TEL】077-543-0111  
【FAX】077-543-9100



JR石山駅より 無料バス運行(約10分)

### ④クサツエストピアホテル

3分科会 瑞祥

〒525-0037  
滋賀県草津市西大路町4-32  
【TEL】077-566-3333  
【FAX】077-565-7775



JR草津駅より (徒歩約5分)

### ⑤ホテルポストンプラザ草津びわ湖

4分科会 ケネディルーム

〒525-0037  
滋賀県草津市西大路町1-27  
【TEL】077-561-3311  
【FAX】077-561-3322



JR草津駅より (徒歩約1分)



# 全体会場 分科会会場図



## ■大会お問い合わせ先

第61回 全国公立学校教頭会研究大会  
 第57回 近畿公立学校教頭会研究大会  
 2019年度 滋賀県小中学校教頭会研修会

全国公立学校教頭会研究大会 滋賀大会 実行委員会  
 実行委員長 高嶋 利明

〒520-0051 滋賀県大津市梅林一丁目4-15 教育会館内

【TEL】077-525-1011 【FAX】077-521-7345 【E-mail】shiga-25@estate.ocn.ne.jp

●第2次案内掲載先…全国公立学校教頭会ホームページ(<http://www.kyotokai.jp>)内滋賀大会 第2次案内

## ■大会参加・宿泊のお問い合わせ先

株式会社 日本旅行 滋賀教育旅行支店

〒525-0025 滋賀県草津市大路一丁目10-1

【TEL】077-563-2001 【FAX】077-562-5613 【E-mail】kyotokai@nta.co.jp





# 全体会 講演会

## 演題

### 『琵琶湖水系の美しい自然』

## 講師

写真家

今森 光彦 氏

## 講師紹介

写真家。琵琶湖をのぞむ田園風景の中にアトリエを構え活動する。自然と人とのかかわりを「里山」という空間概念で追い続ける。一方、熱帯雨林から砂漠まで、地球上の辺境地の取材を続けている。また、近年は、自然のかたちをハサミひとつで鮮やかに切り出すペーパーカット作家としても知られ、その作品は、全国の美術館などを巡回。

## 講師のプロフィール

- 一九五四年 滋賀県生まれ。
- 一九八〇年 フリーランスの写真家となる。
- 一九八八年 写真集「今森光彦 昆虫記」出版。
- 一九九一年 写真集「スカラベ」出版。
- 一九九四年 東川賞新作家賞受賞。

二〇〇〇年 「映像詩 里山」

NHKスペシャル放映。

二〇〇五年 日本写真協会年度賞 受賞。

二〇〇八年 「里山 いのち萌ゆる森 今森光彦と見つめる雑木林」 NHKスペシャル放映。

二〇〇九年 成安造形大学客員教授 就任。

二〇一二年 切り紙展「魔法のはさみ 今森光彦の切り紙美術館」開催。

二〇一四年 作品展「切り紙展『蝶』開催。

二〇一五年 地域文化功労者文部科学大臣表彰。

## 【講演内容】

### ○琵琶湖周辺の現状と課題

里山がなくなり、雑木林を管理する人も少なくなり、環境を保全するための機能をはたしていない。再度、里山や雑木林についての価値を人々が認識し、保全していく取組をしていく必要がある。

森が荒れて、獣が居住地に降りてくるようになる。これは、寒さをしのぐ巨木がないことや餌となる木の実や昆虫が少ないこと、その反対に農地には、食料がたくさんあるためである。

琵琶湖の名産である鮒が、遡

上できない。鮒は川を遡上し、

田んぼに産卵していた。しかし、

ダム建設や都市開発などで遡上しにくくなっている。湖、公園、住居、森これらは、管理する行政の担当者が異なる。しかし、鮒は横断的に移動する。そのため、全ての担当者の理解と協力によって、鮒が遡上しやすい環境を整える必要がある。

○自然環境を守るための課題

国定公園では、植物が自由に剪定できず、葎しか生えない。自然を守るための決まりが、逆に適切な手入れもできずに、荒れ始めている。

水辺のトンボやドンコなど希少動物の保護の手立てが十分でない。琵琶湖では、姿を見せなくなった動物たちは、天敵の少ない場所に逃れ、名もない小川に生息していることが多いので、早めの対策が必要である。

琵琶湖は「なまます」「鮒」「コイ」などの多くの在来種が多く、十六種類の固有種が生息している淡水魚の宝庫である。しかし、ブラックバスなどの外来種による固有種の絶滅が危惧されている。滋賀県では、「オオクチバス」「コクチバス」「ブルーギル」「チヤネルキヤットフィッシュ」の四種類が有害外来魚として駆除の対象となっている。

子供たちが、湖、川、田んぼ

がなくなっていることを知らない。最近では、居住地の開発が進み、田んぼまで鮒が上がってきにくくなった。昔は、田んぼに鮒が集まり、産卵している様子をよく見かけた。そのことで、湖と田んぼがなくなっていることを知った。

○琵琶湖水系の魅力

湖岸の桜は名所となっており、(海津大崎)桜が湖岸に突き出て、桜のトンネルができる風景が楽しめる。

冬の葎焼きが風物詩となっており、葎原を焼き払うことで、害虫を駆除し、新しい葎の栄養となる。春には、葎の新芽が水辺に広がる。

○なくなっていく水辺の風景

漁法に「モンドリ漁」(エンジンを使わない小船で、円筒状の網籠を仕掛けて行う漁)がある。葎原の減少で生態系が崩れ、魚も減っている。

湧き水を利用した水路の「川端」は、各家で水を引き込み、鯉や小魚を飼い、野菜くずなどを食べさせることで水を汚さない工夫がされている。しかし、このように水と共に生きる文化が、継承されなくなってきた。

○ 終わりに

物事の善し悪しを判断するときには、比較して考えることが大切である。雑木林にしても、熱帯雨林とどう違うのか私は、実際に熱帯雨林の地域に一月ほど行って、その暮らしを体験して考えてみた。

このように、自然に興味・関心を持ち、自然と共生する生き方の大切さを知り、行動できる子供を育成してほしい。

【感想】

今森氏は、琵琶湖の美しさ、自然の大切さの価値を世界の自然環境と比較することで自覚し、写真やペーパー作品として、多くの人々に伝えようと努力されていた。

このように、自分の感じた価値をどのような方法で人に伝えるかを自らの力で考え、行動することが、これから求められる資質・能力であると感じた。



第1A分科会

教育課程に関する課題

指導助言者

森田 智也

北海道札幌市立篠路西小学校長

古谷 匠

滋賀県草津市立常磐小学校長

提言者

末木 良典

北海道旭川市立東五条小学校

宅間 治郎

京都府京丹波町立蒲生野中学校

研究主題

1 今日の課題を捉え教育課程の充実を図る教頭のリーダーシップとは何か

2 学力向上に向けた授業改善と学びの環境づくりのシステム構築に向けた教頭の役割

3 「学びを育む京丹波町メンツド」の理念に基づいた研究と実践を通して

「1」について

① 取組事例

ア 小中連携・一貫教育の推進  
イ 60分授業『パワー60』の実施  
ウ 『教育課程編成の指針』を踏まえた教育課程の充実  
エ 主幹教諭の有効活用  
オ 『働き方改革推進プラン』の策定・推進

② 成果〇と課題●

〇 市教頭会としての課題を明確にした研修会の実施により、各教頭の問題意識等が高まった。  
〇 汎用性のある教頭のリーダーシップの在り方が明確になった。

● 各学校の取組事例を自校の学校改善につなげることができよう、研修会の内容や進め方を一層工夫する必要がある。

「2」について

① 取組事例

ア 全教員を対象にしたアンケート調査による実態把握

イ 全教員による先進校視察の実施

ウ 年間一人一回の研究授業の実施

エ 自ら課題を設定して取り組む自主学習ノートの活用  
オ 生徒会活動を軸とする自治活動の充実及び学びの環境作り

② 成果〇と課題●

〇 メソッドの積極的な導入が、教員の意識向上につながった。  
〇 研究授業の機会の増加により、若手教員が積極的に参加するようになった。

〇 研修会を計画的に企画することにより、校内研究の質が向上した。

〇 アンケート調査において、学習に対する肯定的な回答が増加した。

● 町全体として小中学校が連携を図りながら取り組む課題を明確にする。

● 各種研修機関や教育委員会と連携・協力した人材育成

を進める。

● 働き方改革の趣旨を踏まえ、各校における持続可能なシステムの構築を行う。

指導助言

「1」について

提言では、中学校区内の各小中学校が、それぞれの教育目標を共有している。組織が一体的な取組として小中連携を進めていくためには、ここからスタートするとよい。  
中学校の生徒会が、三学期ではなく、十二月に小学校を訪問する取組は、六年生の進学不安を少なくすること、中学校の生徒の自律自治能力の向上を図る上で意義がある。

主幹教諭の運用については、地域によってそれぞれである。教務主任の役割を兼ねている主幹教諭も多く、教育課程の管理という意味で、主幹教諭の配置があるが大変充実する。

学校の諸問題を解決するために、スクールロイヤーを入れるなど、人、物、お金が必要である。そのような要望をしていく

とともに、何が大切であるかを考えながら、学校の教育活動を見直して行くことが、働き方改革につながる。

「2」について

先生方から生まれてきたメソッドが学校に浸透し、地域にも広がっていくシステムが素晴らしい。  
同じ中学校区の複数の小学校が、同じメソッドで同じような学び方をしていれば、一つの中学校に進んだ際、中学校での学習を進めやすくするという点に意義がある。

学び方と学習の関係については、全国学力・学習状況調査の児童質問紙の結果にも表れている。提言で発表された、「課題を位置付け、対話をもって振り返りをする」という学習方法の有効性が、様々なデータによって示されている。情報収集と対話が、各教科の学びで重要と見える。

## 第2分科会

子供の発達に関する課題

### 指導助言

野口 みか子

横浜市立権太坂小学校長

前田 利幸

彦根市立城東小学校長

### 提言者

澤 明美

滋賀 甲賀市立佐山小学校

望月 光洋

山梨 市川三郷町立

市川東小学校

島中 伸一

大阪 豊中市立第九中学校

### 研究主題

1 課題のある子供を中心に据えた、どの子も育つ学びづくりと仲間づくり

～共通実践と個別実践から効果的な教頭の関わりを探る～

2 児童生徒の理解・生徒指導・豊かな人間性の育成を目指して

～関係機関との連携のあり方や方策について～

3 豊かな人間性の育成と校区一斉清掃

～地域との連携を深める取り組みに教頭としてどう関わるか～

### 「1」について

#### ① 取組事例

ア 学びづくりの実践・検証  
・ 甲賀市授業スタイルを生かして

イ 仲間づくりの実践・検証  
・ Q U 調査の活用  
・ 全校体制の取組

#### ② 成果〇と課題●

○ 市としての教育課題を共有し、課題のある子を中心に据えた公務運営につなげられた。

○ 教頭のかかわりのポイントが明確になった。

● 教職員の負担を軽減し、なおかつ効果的な教育実践が行えるよう、共通実践ではない市内各校の取組についても情報交換ができる方法を検討する必要がある。

### 「2」について

#### ① 取組事例

ア 関係機関との連携の在り方についての職員の意識調査

イ 連携可能な関係機関一覧の作成

ウ 関係機関との連携事例の検証

エ 望ましい連携のあり方についての研究、望ましい連携に向けて

② 成果〇と課題●

○ 職員の組織と役割を明らかにすることの重要性が確認できた。

○ 教頭が情報の集約点となり、日常的に情報の共有化を図ることの重要性を明確にすることができた。

● どの関係機関と連携をとればよいかを精選されていない。

● 連携に向けた体制づくり手順の実践と検証を継続し分析する必要がある。織作りが重要となる。

ア 校区一斉「あいさつ運動」

イ 家庭教育講演会

ウ 広報紙の発行

エ クリーンアップ大作戦

② 成果〇と課題●

○ 一〇〇〇名を超える活動。小学生から高齢者まで参加できるボランティア活動として定着してきた。

○ 地域の大人が子供たちを見守っているというメッセージを発信する場になっている。

● 運営上、各小学校区の意見集約や、調整が必要である。

● 地域の取組状況の差を埋めるために、意見交流や調整に教頭がどうかかわっていくかが重要である。

### 指導助言

「1」について

研究の取組を、職員一人一人が自分事として考え具現化していくことが重要である。そのための組織作りが重要となる。

「3」について  
① 取組事例  
学校単位だけでなく、地域や市

の単位での取組が重要である。「2」について

日常的に情報を共有することが大切である。そのために役割分担など具体的に決めて実行に移すことが重要である。

「3」について  
学校だけでなく、地域や参加した人たちにもメリットとなる活動が大事である。地域の人が学校のために何かしてくれるのは当たり前で、学校も地域のために何ができるかを考えなければならぬ。

今、地域組織も変容してきている。学校を通しての地域活動へ参加し、踏み込んで地域の声を聞いていくことも大切である。



### 第3分科会 教育環境整備に関する課題

#### 指導助言者

平敷 兼栄

那覇市立城東小学校 校長

今井 公夫

大津市立堅田中学校 校長

#### 提言者

赤沢 文彦

東近江市立箕作小学校

加藤 準一

愛知県名古屋市長

味鏡小学校

前木 伸一

奈良県十津川村立

十津川中学校

#### 研究主題

1 「働き方改革」と教頭の役割  
学校における業務の効率化  
と情報化

2 子どもが安心・安全に過  
せる環境整備と学校・地域・  
家庭との連携を通して

3 地域連携教育と教頭の職務  
と日本一広い村にある学校  
の取組

#### 「1」について

① 効率化の実践事例紹介

- 適切な時間管理の推進
- 文書・備品などの整理整頓
- 部活の短縮

② 地域学校協働事業の活用  
学校ガイドブックの作成  
情報化の実践事例紹介

③ 職員会議の電子化  
グループウェアの活用  
校務処理システム集の活用  
校務分掌フォルダの統一  
成績処理の電子化  
校務システムの導入  
成果〇と課題

④ 教職員の意識の変容  
超過勤務の縮減  
緊急時の対応  
情報スキルの向上  
指導・助言  
業務改善によって、教頭に  
業務が集中しないように  
しなければならない。

- 働き方は、その人の生き方  
を決めるものであるため、  
職員個々に応じた対応が  
必要である。
- 教員の資質向上が、前提と  
なる。
- 改革に聖域はないが、保護  
者や地域の理解を十分に  
得ることが必要である。

#### 「2」について

① 地域防災に関する実践例紹  
介

- 空き教室を利用した防災倉  
庫
- 総合防災訓練

② 防災マップづくり  
教頭会における情報交換  
教頭アドレスの共有  
連携事項の共有  
成果〇と課題

③ 学校・家庭・地域との連携  
により、安心・安全な環境  
整備が進んだ。  
④ 学校間の情報共有の術が共  
通理解できた。  
被害の想定を広げる必要  
がある。

④ 指導・助言  
物品管理は、使用後の片付  
けまで「あるべき所に、あ  
るべき物がある」ことが重  
要である。  
いつ・だれが対応するのか、  
そうでない場合も含めて  
考えることが大切である。  
成功の鍵は目的が共有でき  
ていることである。方法を  
共有しても、緊急時には対  
応できないことがある。

#### 「3」について

① 地域連携教育推進活動の事  
例紹介

- 生徒交流会による中高生の  
親睦と交流
- 文化講演会で車いすダンス

- をとおしたキャリア教育
- 総合学習発表会をとおした  
郷土教育

② 小中連携部会による生徒指  
導に関する連携  
教科間の連携による授業の  
相互乗り入れ  
教員交流会による活動の共  
通理解

③ 地域行事とのかわり  
過疎地域の行事は、児童生  
徒抜きでは成り立たない。  
児童生徒の地域行事への積  
極的な参加を促す役割を  
学校が果たしている。  
教職員も地域住民として参  
加し、生徒・保護者・地域  
との交流の中で得られる  
信頼関係や情報をもとに、  
教育力の向上につなげて  
いる。

④ 成果〇と課題  
地域との綿密な計画によ  
り、参加した児童生徒の充  
実感や達成感につながっ  
た。  
PDCAサイクルを確立  
し、改善するシステムを構  
築する必要がある。  
保護者や地域の理解と信  
頼をさらに深められるよ  
うな取り組みを模索して  
いく必要がある。

④ 指導・助言

- 小中連携は、継続性が難し  
いので、今後の取組に期待  
したい。
- 地域人材を学校教育にどの  
ように取り入れるかがポ  
イントである。
- 職員の意識改革が子供を変  
える一歩となる。

イベント的な活動になっ  
たり、連携することが目的に  
なったりすることがない  
ように、「どんな資質・能力  
を子供たちに身に付けさ  
せるためにやっているの  
か」「教育課程にどのよう  
に位置付けるのか」を明確  
にすることが大切である。



## 第4分科会

### 組織・運営に関する課題

#### 指導助言者

日下 哲也

香川県高松市立亀阜小学校長

杉本 義明

滋賀県長浜市立長浜小学校長

#### 提言者

菊谷 愛

滋賀県大津市教頭会

大津市立栗津中学校

宮本 和典

和歌山県紀美野町教頭会

紀美野町立小川小学校

村木美晴・川上展弘

岡山県小田郡小中学校教頭会

矢掛町立小田小学校・三谷

小学校

克服する取組

～矢掛町における合同授業  
と合同学年部研修の推進に  
おける教頭の役割～

ア について

① 取組事例

ア 整理 見える化

イ 生徒が主体的になる指導観

の活用

ウ 発信と共有

エ 教職員の力量の向上

② 成果〇と課題●

○ 暴力行為や触法行為 授

業上スケープの軽減

○ 学校振り返りアンケートの

「学級の雰囲気がいよゝ」の項

目が上学年ほど上昇

○ 全国学力学習状況調査の

「生徒間の話し合い活動を通じ

て自分の考えを深めたり 広

げたりできているの項目が2

0.4P上昇

● 教育のユニバーサルデザイ

ンの推進

● 生徒にらって目標を持ち意

欲的に取り組める教育活動

の実施

● 学校が担うべき業務の大

胆な見直しと 働き方改革の

推進

「2」について

① 取組事例

ア 地域や保護者と連携した事

業の推進

イ 校種間連携の取組の推進  
成果〇と課題●

○ 地域の方々の学校理解の

深化と保護者や学校とのつ

ながりの強化

○ 子供たちの地域に対する

愛着の深化

○ 教頭を地域との窓口にする

ことによる担任の負担軽

減

○ 児童相互の交流による中

学校進学後の不安解消

○ 教職員相互の交流や情報

共有による校種間の円滑な

接続

○ 大学や高校との継続的な

連携 交流による学校の活

性化

● 学校と地域をつなぐネット

ワーク体制 連携のさらなる

強化

● 地域の協力者の高齢化

新たな人材確保や既存事業

の見直し

● コミュニティスクールの仕組

やねらいの教職員や保護

者 地域の浸透

● 地域連携事業を進めるこ

とによる教職員の負担増加

● 児童減による事業継続の

困難と学校の停滞 衰退化

● 継続的 組織的な連携に

していくための教頭のマネジ

メント力の向上

● 教職員相互の交流や情報  
共有 相互理解の推進

「3」について

① 取組事例

ア 矢掛町における合同授業

・ 小規模化に伴う課題解消

・ コミュニケーション力の向上

・ 小中連携

イ 合同学年部研修会

・ 合同授業の打ち合わせ

・ 学力向上の取組の広がり

・ 人材育成の場としての機能

② 成果〇と課題●

○ コミュニケーション力 人間

関係形成能力の高まり

○ 小中学校の校種間交流の

深まり

● これまでの取組に対して

効率的に運用するための手

立て

● 授業準備などに対して

効率化を図ることによる担

任の負担軽減

指導助言

ア について

授業改善で子供は変わって

いく。そのために、教師は緻

密で具体的な準備が必要で

ある。発言の量と授業内容の

整合性 学ぶ価値が生まれる

授業作り 全ての子供の多様

性が生かされるための環境

作りなどを大切にしてい

い。また、学校の組織力を高

めるために、研修の時間に価

値があるかを管理職としてし

っかり評価することも大切で

ある。さらに、究極の働き方

改革を推進することが、落ち

着いた学校にもつながる。

「2」について

学校を活性化させるため

には、地域の伝統文化を題材

にすればよい。また、大学と

連携として、学生と子供たち

との交流をさせてほしい。学

校運営協議会を組織していく

上で大切なことは、現在ボラ

ンティアをしていていての方

を中心人物に据えたりコー

ディネータの人材確保として

教職員以外のサポートスタッ

フを有償で導入する取組も

ある。

「3」について

合同研修会などを通して

若年層の育成を図ることが

大切である。その際、インフォ

ーマルな場やグループ、雰囲気

作りが大切である。組織運

営について必要なことは、説

明ができる目標設定。プロジ

エクトチームとしての組織そ

して評価である。課題は、事

業に対する省力化、脱マンネ

リ化、教頭の負担軽減などで

ある。

- ### 研究主題
- 1 学校の組織力を高める教頭の役割  
～校内研究による授業改善から教育目標の具現化～
  - 2 小規模校における学校活性化を目指した取組  
～地域や家庭 校種間の連携を通して～
  - 3 学校小規模化に伴う課題を

- ① 取組事例  
ア 地域や保護者と連携した事

- 地域連携事業を進めることによる教職員の負担増加
- 児童減による事業継続の困難と学校の停滞 衰退化
- 継続的 組織的な連携に

- 授業準備などに対して効率化を図ることによる担任の負担軽減

- これまでの取組に対して効率的に運用するための手立て